令和８年１月26日

ご門信徒　様

宗教法人　光照寺
住職　濱嵜重信

第39回　　修正会　定例法座　ためして仏教！！ご報告

- 日　時　　令和年１月11日〔日〕　13時半～15時半
- 場　所　　光　照　寺
- 必要な物　お数珠　筆記用具　赤本
- 今回のお題

「最近の若い人ってどうですか」

スケジュール：
１３：３０　お勤め
１３：４５　座談
１４：３０　法話
１５：３０　終了

私がどこに立ち、自分は正しいと言っているのか？

最近の若い者は、なっておらん、打たれ弱い、などの言葉は、洋の東西、古今を問わず若者批判の枕詞として使われてきました。

つまり最近の若い者はとの言葉は、年長者から言われ続けてきた言葉、そして自分が年齢を重ねてきた時に思ったり、発したりした言葉ではないでしょうか。そして言われた時は、言う人に対し、いつまでも古い考えや価値観にとらわれている老害と思った事もあるのかもしれません。それは、私自身がどこの立場にたつのか、どのように物事を捉えるのかで、最近の若い者や、老害になるのでしょう。この言葉からは、自分は正しい間違いないと主張する人間のあり方が問われそうです。私たち人間は、そのようなことを繰り返しやってきたのかもしれません。

同じような事を繰り返しながら、同じでなくなっている。

『方丈記』に、川は涸れることなく、いつも流れている。そのくせ、水は元の水ではない。よどんだ所に浮かぶ水の泡も、あちらで消えたかと思うと、こちらに出来ていたりして、けっしていつまでもそのままではいない、世間の人を見、その住宅を見てもやはりその調子だ。と出てきます。私たち人間は、同じようなことを繰り返しやってきた、しかし同じでなくなっている。無常という自然の道理の中で絶え間なく少しずつ入れ替わりながら、成り立っているようです。

休憩中は
みんなで
善哉を頂きました。

私は、人間の営みを行いながら人間性を失っているのでは？

『正信偈』には、五濁悪時群生海と出てきます。五濁とは、五つの濁り、劫濁（時代が後になるほど事件や事故が増える）見濁（見かたが濁る）煩悩濁（欲望が益々盛んになる）衆生濁（人々が濁る風紀が乱れる）命濁（寿命が短くなる。大切な命を大事に生きる寿命が短くなる）五濁は命濁から始まります。私は、同じようなことを繰り返しやってきた、しかし同じでなくなっている。人間の営みを行いながら人間でなくなっているのでは？

三間の喪失

そこには、私が、三間（時間・空間・人間）を固執し握ろうとする気持ちが、益々強くなっていることがあるのではないでしょうか。

時間軸には、過去・現在・未来があります。過去・未来を考えず今だけで物事を捉えることが増えているように感じます。すると振り返ること・やり直し・チャレンジに不寛容で過程を見ず、成果や結果が全てで、成果を出す為には手段を選ばないこともありえそうです。

空間の喪失、日本の住居から無くなりつつあるもの、形を変えているものとして、床の間、囲炉裏、仏間があります。床の間は、落ちない所とこしえ変らないという意味でも使われます。囲炉裏、日本では、火を大事にしてきました。火は、暖を取る、調理する、囲炉裏を囲むなど、生命を保つ重要な役割を担ってきました。仏間、ご本尊の前の空間、自分を省みる空間それが、形を変え、なくなりつつあります。

人間の喪失、人間関係の希薄さです。

命を私の命と私物化して捉えると、縦の関係（祖父母―父母―私―子―孫）横の関係（友人・職場関係、地域の人）などのつながりを切って考え、生は良くて、老・病・死は悪いと捉え、突き詰めると自分だけよければと考えそうです。

素晴らしいものは誰のものでもないものだ

朝日新聞『折々の言葉』に素晴らしいものは誰のものでもないものだ　長田弘先生と出ていました。鷲田清一先生の解説に、ひとは豊かでいたい悦びをみつけたいと願い、その為に「なくてはならないもの」をわがものとして所有していたいと願うが所有できるものはいつか失われる。本当になくてはならないものは所有できないものだけだと詩人は言う。水と石、葉の繁り、午後の静けさ、鳥の影・・・大切なものには何一つ「わたしのものはない」と、詩集『世界はうつくしい』。

所有することへの固執をやめることは出来ないかもしれません。所有することへ固執する、にぎったものを離そうとしないのが私であるということを知らないことが、時間を失い・空間を失い・人間性を失うもとにあり、自他共に知っていく心を閉ざしていきそうです。最近の若い者という言葉が、人間のことも自分のことも他人のことも知ろうとしていない私のあり方を問うていくきっかけになっていけばと思います。